

日本藻類学会第 30 回大会開催記・参加記

寺田竜太・野呂忠秀：日本藻類学会第 30 回大会を終えて

2006年3月26日から29日までの4日間、鹿児島大学稲盛会館と工学部共通棟において日本藻類学会第30回大会を開催いたしました。本大会では、146題（シンポジウム4題、口頭発表90題、ポスター発表52題）の講演に対して224名の方が参加されました。鹿児島は大都市圏から離れており、参加者数の伸び悩みを危惧していましたが、30回記念にふさわしい大盛會となりました。全ての行事を予定通りに実施することができましたことに対して、関係各位および参加者の皆様に厚く御礼申し上げます。

大会に際しては、可能な限りの省力化・電子化を目指して過去の大会の開催事例を参考にしました。大会参加申込・要旨の受付は、28回大会（札幌市）、29回大会（京都市）と同様に原則として電子メールでの受付としました。藻類53巻3号に掲載された大会案内において書式に関する留意点を挙げさせていただきましたが、皆さん概ね遵守下さり、当初予想よりもスムーズに要旨集を編集できました。1990年代までの藻類学会要旨集は、各申込者が印刷した要旨のオフセット印刷でしたのでフォントを任意に小さくして字数を増やすことも可能でしたが、数年前からの現方式では字数の遵守が重要になっています。皆様のご協力に改めまして感謝する次第です。

今回、初めての試みとして、大会プログラムと要旨集を日本藻類学会のホームページ（HP）上にpdfファイルで大会前に公開しました。この試みは、発表時間の確認や他の発表要旨の閲覧等で、皆様よりご好評をいただきました。また、HPをご覧になった非会員の方からも参加申し込みがありました。さらに、和文誌編集委員会の編集ソフトのトラブル等

で、和文誌「藻類」の印刷・製本が大会前に間に合わないという予期せぬ事態になりましたが、殆どの参加者が事前にHP上で大会プログラム・要旨集を確認しておられたことから、大会自体に大きなトラブルはありませんでした。大会プログラム・要旨集のHPへの掲載については、今後の開催地でも是非ご検討いただければと思います。なお、大会プログラム・要旨集は例年「藻類」1号の末尾に掲載し、その別刷りを大会配布用として用いています。今回は前述のトラブルがありましたが、大会プログラム・要旨集は和文誌「藻類」全体の印刷・製本より先に印刷していただきましたので、大会に間に合わせることができました。和文誌編集委員会より編集遅延の連絡を受けたときは正直かなり動揺しましたが、その後迅速に対応下さいました株式会社東プリの皆様に御礼申し上げます。

口頭発表は、数年前からPower Pointを用いた方式になっていますが、本大会では27回大会（津市）を参考にしてローカルLANを大会期間中のみ独自に設置し、一階の受付パソコン（2台）から二階の発表会場内のパソコン（4台）へ発表ファイルを順次転送しました。幸い、特に大きなトラブルはありませんでした。

口頭・ポスター発表申込数は、過去最高の142題に達しました。当初は口頭発表に100題以上の申し込みがあり、2会場2日間の日程では物理的に困難であることから3会場も検討しました。ただ、3会場では聞きたい講演が重複する不便さもあります。実行委員会および関係各位と検討の結果2会場のままとし、10名ほどの方にポスター発表へ変更いただきました。ご協力いただきました皆様には、この場をお借り



ポスター会場



懇親会



公開シンポジウム会場

してお詫びと御礼を申し上げます。口頭発表は、昼休み以外に休憩なしの過密プログラムでしたが、皆さん発表時間を厳守下さり、ほぼ定刻どおりにプログラムを実施することができました。ポスター発表も52題と過去最高数になりましたが、大型教室を2部屋用意し、参加者全員が同一時間帯に見られるようにゆとりをもった配置にしました。ポスターセッションの時間は例年1時間ですが、発表数を考慮して1時間30分（昼休みを含めると2時間15分）とし、参加者の最も多い27日午後におこないましたところ大変ご好評を賜り、時間中は各所で熱気ある議論が展開されていました。藻類学会が今後とも発展していくことを考えますと、会期を延ばすか口頭発表会場数を増やす議論になると思いますが、ポスター発表数を増やし、ポスター中心の大会にすることも一案だと思います。

懇親会は、27日夜に鹿児島大学郡元南食堂エデュカでおこなわれました。鹿児島では、親類、知人の宴席に呼ばれると食べきれないほどの量のご馳走で歓待されます。我々もこの鹿児島流の精神に従い、懇親会の途中で料理が切れないように吟味しました。幸い、鹿児島県漁業協同組合連合会がご提供くださったカンパチや、指宿市岩本漁協がご提供くださったマダコ、奄美の鶏飯（けいはん）やさつまあげ、鶏刺、黒豚の角煮など郷土色豊かな料理を味わっていただくことができました。薩摩焼酎も50銘柄ほど用意しましたが、どれも好評で鹿児島らしさを味わっていただけたのではないかと思います。

28日には、「九州・沖縄の藻類と環境：藻類生態系の保全とさらなる利用を目指して」と題した公開シンポジウムを稲盛会館で開催しました。本シンポジウムは日本藻類学会第30回大会実行委員会と鹿児島県藻場造成研究会が主催し、藻類学会会員のみならず行政および教育関係者、水産関係者、一般の方を含む151名の方々の参加を得ました。九州に特化

したテーマでしたが、絶滅危惧種の現状や赤潮問題、温暖化に関連する熱帯性海藻の増加等、九州における藻類を取り巻く（あるいは藻類がもたらす）環境問題を認識するよい機会になったと考えております。特に、オキナワモズクの養殖技術開発に関する講演は、藻類研究が産業創生に貢献した事例として多くの参加者に感銘を与えました。本シンポジウムでご講演いただきました本城凡夫先生（九州大学大学院農学研究院教授）、吉田忠生先生（北海道大学名誉教授）、当真武氏（株式会社沖縄環境分析センター）、田中敏博氏（鹿児島県水産技術開発センター）にこの場をお借りして御礼申し上げます。

29日には、エクスカージョンとして鹿児島県水産技術開発センターを見学しました。同センターは、平成16年に開所した日本で最も新しい公設水産試験研究機関であり、研究員の動線や作業効率を考慮した施設設計が高い評価を受けています。こちらでは最新の施設を見学するとともに、田中敏博氏のホンダワラ属藻類培養タンクを見学しました。9tタンクの中で数年に渡って世代交代を繰り返すミニ藻場に、参加者の関心が集中しました。帰路の途中には、知覧特攻平和会館や知覧武家屋敷に立ち寄りしました。また、29-30日には、鹿児島県水産技術開発センターが「第3回亜熱帯性ホンダワラ属藻類の分類に関するワークショップ」を学会連動企画として開催し、水産試験研究機関の研究者や大学院生を中心に26名が参加されました。

本大会は、鹿児島で開催された初めての藻類学会大会でした。大会実行委員5名の小所帯で、当初は不安な点多々ありましたが、逆にフットワークの軽い点を活かして準備作業に取り組めたと思います。さらに、開催直前の準備作業や会期中は、鹿児島大学の大学院生・学生に献身的に協力してもらいました。卒業・修了の忙しい時期にもかかわらず、文句一つ言わず協力いただいたことに心から感謝します。また、開催準備に際しては、川井浩史先生（神戸大学）、羽生田岳昭先生（同左）、堀口健雄先生（北海道大学）、畠田智先生（同左）、倉島彰先生（三重大学）、北山大樹氏（国立科学博物館）、村岡大祐氏（東北水研）にご助言を賜りました。遠隔地にもかかわらずご参加いただきました皆様をはじめ、関係各位に改めて御礼申し上げます。

本大会の大会実行委員は下記のとおりです。

日本藻類学会第30回大会実行委員会

藻類学会会員：野呂忠秀（鹿児島大学水産学部）、寺田竜太（同左）、新村巖（元鹿児島県水産試験場）、田中敏博（鹿児島県水産技術開発センター）、和田実（鹿児島県農林水産事務所）；学生会員：島袋寛盛（鹿児島大学水産学部）、井上真吾（同左、現・日本澱粉工業株式会社）、外林純（同左、現・理研食品株式会社）；大会経理：山神まさよ（非常勤）。

（鹿児島大学水産学部）